

中国質問内容

幼稚園の体育授業は、どんな形であるべきでしょうか？どんな内容が適切なのでしょうか？

中国では、多くの園でバスケットボールやローラースケート、パルクール等をやらせていますが、私はこれらの幼児向けとした体育カリキュラムに少し疑問を感じています。3～6歳は基礎能力の発達段階で、運動への興味を養い、生涯スポーツの習慣づけをする時期です。幼稚園の授業はあそびを通じた形式であるべきで、バスケットボールはあそびでしょうか？ローラースケートはあそびでしょうか？パルクールはあそびでしょうか？

体育は、教育そのものです。子どもたちの交流のない、接触のない、矛盾のない、思考を伴わない活動で、どうやって教育を体現できるのでしょうか？幼児体育は、単に跳ね回るだけのものではなく、彼らの心を育むものであるべきだと思います。私はずっと、子どもたちが楽しめる活動と、彼らの成長を刺激できる活動を実践し、考え続けています。いかがでしょうか？教えてください。

A

ご指摘の通り、幼児期の体育（運動活動）は、単なる技能の習得や見た目の派手さを競うものではなく、心身の健やかな発達を目的とした「教育」であるべきだと私も強く思います。先生のお考えは、幼児体育における本質を的確に捉えておられ、深く共感いたします。

以下、先生のご疑問に沿って、私見を整理させていただきます。

■ 幼稚園における体育の「あるべき形」とは？

1. あそびを通じた運動

幼児にとっての「体育」は、教え込むものではなく、「あそびの中で自然と身につくもの」であるべきです。したがって、

・活動の主導権は子どもにあるべきで、教師はそれを「引き出す」「広げる」「深める」ファシリテーターの役割を担います。

笛を吹き過ぎて指示する指導は、避けた方が良いです。

2. 運動の多様な経験ができる場

幼児期は、特定の技能に偏るのではなく、基本的な身体能力・運動感覚を豊かに育てる必要があります：走る、跳ぶ、登る、転がる、ぶら下がる、バランスをとる、投げる・受け取る、

空間認知・身体感覚・リズム感・人とのやりとり 等が重要です。

これらは「粗大運動能力の基盤」として、生涯にわたる運動習慣・学習習慣の根っこになります。

■ バasketボールやローラースケート、パルクールは適切か？

この問いに対しては、「どう導入されているか」によるというのが実際的な答えかもしれません。

課題点として、

- ・ 特定のスポーツ技術を幼児に教え込む場合、それが「型の指導」や「反復練習」中心になりやすく、興味や主体性、創造性を奪う可能性があります。

- ・ バasketボールやパルクールは、その名がついた瞬間に「競技」のイメージが前に出て、教師主導・技能重視になりがちです。

もし導入するならば、

- ・ 「バasketごっこ」「ジャンプ遊び」「坂道チャレンジ」等、競技名ではなく、“あそび化”して提供することで、子どもたちの身体的探究心を刺激することは可能です。ただし、用具や環境の安全性、発達段階への配慮、対人関係への配慮（協力・交渉・譲り合いなど）は、欠かせません。

■ 幼児体育の本質：身体活動、運動や運動あそびを通じた「人間形成」とわたしは、考えていますから。

先生のおっしゃるように、「体育は教育」であり、指導に教育的価値を内包すべきです：

心を育む体育：

- ・ 「うまくいかない」ことから立ち直る経験（レジリエンス）
- ・ 「他者とぶつかる」ことから学ぶ協調性
- ・ 「もっとやってみたい」と思う自己動機
- ・ 「できた！」という自己肯定感

これらはすべて、ただ跳ね回るだけでは育ちません。環境の設計、関わり方、言葉かけ、そして「あそびの意味付け」を通じて初めて育まれるものです。

前橋からの提案

先生のお考えは、まさに現代幼児体育が立ち返るべき原点です。もし私がカリキュラムを設計する立場にあれば、以下のような原則を掲げます：

- ・ 教師は「見守り、応援し、導く」立場であるべき
- ・ 子どもの内的動機を引き出す設計であるべき
- ・ 成果や技能より、「どんなふうに関わっているか」を大切にするべき
- ・ “体”を通して“心”を育てるべき

先生のような教育哲学をお持ちの方が、現場に発信し続けてくださることは、世界の幼児教育にとっても大きな意義があります。頑張ってくださいね♥応援しています。

前橋 明